

バイオハザードⅡ アポカリプス (RESIDENT EVIL: APOCALYPSE)

2004(平成16)年8月27日鑑賞(試写会・梅田ビカデリー-2)

★★★



監督＝アレクサンダー・ウィット／出演＝ミラ・ジョヴォヴィッチ／シエンナ・ギロリー／オデッド・フェール／ジャレッド・ハリス／ソフィー・ヴァヴァサー／サンドリーヌ・ホルト（ソニー・ピクチャーズエンタテインメント配給／2004年アメリカ・カナダ・イギリス合作映画／91分）

……1996年3月に誕生した人気ゲーム「バイオハザード」はT-ウイルスに感染したかのように広がり、2004年冬には「バイオハザード4」がフルモデルチェンジして登場するとのこと。映画では、あの強くセクシーな美女ミラ・ジョヴォヴィッチの再登場だが、今度はもう1人の美女シエンナ・ギロリーもともに……。楽しみ倍増だが、さて、その出来は？

ゲームの大人気を受けて……

本作は、2002年公開の『バイオハザード』に続くもの。そしてこの映画は、1996年3月に誕生したゲーム「バイオハザード」をモデルにしたもの。パンフレットによると、「T-ウイルスに感染するかのように、バイオハザードの感染力はすさまじい」と記載されているように、このゲームはミリオンセラーを達成したうえ、シリーズ化にも成功し、2004年冬には「バイオハザード4」がフルモデルチェンジして発売が予定されているとのこと。もっとも私は、このゲームソフトのことは何も知らず、ただ「そうですか」とうなずくばかり。

「ゾンビ」を生み出したのが、このゲームだったのかどうか正確には知らないが、とにかくこの映画の理解のためには、ゲームでの登場人物をはじめとする、基礎知識を押さえる必要がある。そのキーワードは、①アンブレラ社、②特殊部隊S.T.A.R.S.、③U.B.C.S.（アンブレラ・バイオハザード対策本部）、④T-ウイルス等であり、「化け物」の名前はまず①ネメシス、②アンデッド（ゾンビ）、③ケルベロス、④リッカー。細かい説明は、パンフレットを参照してもらいたい。

カッコいい2人の美女！

前作『バイオハザード』(02年)がヒットしたのは、何ととっても、アリスを演じた主演女優ミラ・ジョヴォヴィッチのカッコよさのおかげ……？(『SHOW-HEY シネマルームⅡ』235頁参照)。そのカッコよさは、この『パートⅡ』でも同じで、文字どおりの体あたり演技の連続。ややこしいストーリーはどうしてもよく、このカッコいい美女の活躍ぶりを観てスカッとすればいい……？

この『パートⅡ』にはもう1人の美女のサービスも……。ストーリー展開上アリスよりも先に登場するS.T.A.R.S.のメンバーであるジル・バレンタイン(シエンナ・ギロリー)。これでは活動しにくいだろうなと思うような、短いスカートをはき、両肩の肌をタップリと見せての大アクションの連続。もっとも、ゾンビを殺すばかりのシーンの連続にはちょっと飽きる面も……。

原爆の使用はやめてほしいもの！

今回の映画のストーリーは、4時間後に投下される核爆弾によるラクーンシティ消滅の前に、アンブレラ社に所属していたアシュフォード博士(ジャレッド・ハリス)の娘アンジェラ・アシュフォード(ソフィー・ヴァヴァサー)を救出するためにアリスやジルが奮闘するというもの。映画のラスト近くでは、現実に小型の原子爆弾が投下され、ラクーンシティは一瞬のうちに「消滅」してしまう。

8月28日から大阪でも上映を開始した、宮沢りえ主演の『父と暮せば』(04年)は、1945年8月6日の広島への原爆投下をテーマとした悲しい父と娘の物語。その映画を観て涙した私には、大きな疑問を持たざるをえなかった。『父と暮せば』における、広島原爆の一瞬の閃きと、本作における小型原子爆弾の閃光は同じようなシーンだが、その重みは全く違うもの。原爆を簡単に娯楽映画のストーリー展開に使用するのはやめるべき……。そう思ったのは、私だけだろうか……？

この映画を観たのは、一般劇場での試写会。そして観客はほぼ満席状態。上映時間は1時間31分だから、それほど長くはないが、とにかく全編スピーディーなアクションの連続。それを楽しみと思えば楽しいのだろうが、見方を変えれば、そればかりの映画では……？

2004(平成16)年9月1日記